

## 漢語動詞「怨ズ」で読み解く源氏物語

――動作主体と動作対象および表現者と理解者の関係性を視座として――

柚木 靖史

## 一 本稿の目的

「怨ズ」は、平安時代和文に使用される漢語動詞である。「源氏物語」の中にも使用例があり、一字からなる漢語動詞としては、「念ズ」「奏ス」「誦ス」「具ス」に続いて五番目に使用数が多い。このように、「怨ズ」は、「源氏物語」の中で、比較的多く使用されている語である。したがって、「怨ズ」は、「源氏物語」で使われる一字漢語動詞の中で、物語の内容を理解するためには、重要な語であると考えられる。それでは、「怨ズ」は、「源氏物語」の中で、どのような働きをしているのであろうか。特に、類義の和語動詞である「ウラム」と、その意味や働きにどのような違いがあり、互いにどのような関係性を有しているのであろうか。

本稿では、「ウラム」と比較しながら、「怨ズ」との意味の違

いについて考えてみたい。そのうえで、漢語動詞「怨ズ」が内容理解に果たす役割について言及する。

まず、「怨ズ」の意味について、『日本国語大辞典 第二版』<sup>(1)</sup>の例を挙げる。

【意味】 うらみごとをいう。うらむ。

【語誌】

(1) 平安時代中期・後期の和文中に多用されるが、鎌倉時代以後はほとんど用例が見られなくなる。

(2) 動作主体は三人称のみであって、一人称、二人称の例がない点で類義語の「うらむ」とは異なり、また、動作主体と動作対象との間に、親密な人間関係が存在することの特徴である。

(3) 「うらむ」は、心の動きが意味の中心にあり、「怨ズ」は第三者の他人に働きかける動作が意味の中心にある。

意味としては、「うらみごとをいう」とあり、「言葉に出す」という意味的特徴を示している。(なお、ここでは「気持ちと言葉にして相手に伝える」行為を口外性と表現する。また、「気持ちを言葉にせず心の内にとどめる」行為を心内性と表現する。)語誌にあるように「怨ズ」は、(1)平安時代特有語である点、(2)動作主体が限定される点と動作主体と動作対象の間に関係性が認められる点、(3)動作の意味を表す点で、「ウラム」との違いがあるようである。

これに対して、「ウラム」の意味については、『日本国語大辞典 第二版』で次のように説明している。

【意味】①自分に対してひどいことをした人、または、自分の思い通りにならない物事やその状態などに不満を持ち、悲しく思う。また、残念に思い反発する気持を持つ。うらぶ。うらみる。②憤りの気持を口に出す、当の加害者に不満を訴える。(掲載されている他の意味は、後世の意味であり、本稿の内容と関わらないと判断して、省略する。)

「ウラム」の意味のうち①は、「悲しく思う」「反発する気持を持つ」とあるように、心内性を示し、②は「憤りの気持を口に出す」とあるように口外性を示す。②の口外性に関わる意味は、「怨ズ」の口外性の意味と共通する点がある。したがって口外性という観点から、「怨ズ」の意味と「ウラム」の意味を比較する

ことは、両語の意味を明らかにするうえで有効な方法であろう。

本稿の筆者は、動作主体と動作対象の関係のほかに、表現者と理解者の心的関係性(特に信頼関係)と「怨ズ」の使用が関わっていると考えている。この点について、次節以後で「怨ズ」と「ウラム」がともに使用されている同一もしくは近接する場面を取り上げて、考察する。同一もしくは近接する場面であれば、「怨ズ」と「ウラム」を意識して使用していると考えられること、また、「怨ズ」と「ウラム」を、同一の動作主体と動作対象、同一の表現者と理解者、そして、「ウラム」と「怨ズ」の気持ちや行為の背景にある同一の原因といったように、同じ基準で比較することができると考える。

なお、表現者と理解者の関係は、ここでは、会話文においては話し手と聞き手と表現し、地の文においては筆者と読者と表現する。なお、本稿で使用したテキストは、『新編日本古典文学全集』の「源氏物語」である。<sup>(2)</sup>以下で挙げる用例の所在はこれによるものである。

さて、「怨ズ」は、「源氏物語」の中で、「ゑんず」「ゑず」などと仮名で表記され、「怨ず」のように語幹を漢字で表記されることがない。「ゑん」が「怨」に相当することについては、例えば藤原定家の「下官集」で、「ものゑんし」に対して「怨也」と注記されている例がある。<sup>(3)</sup>また、「源氏物語」の古注釈に、「ゑん」を「怨」とする注記が見られることなどから、「ゑんず」を

「怨ず」とすることにより、一応の根拠は得られるであろう。

・ゑしきこえ給と云事 怨（「光源氏物語抄四」三三ウ）<sup>(4)</sup>

・ゑんすれは おほそう 怨うらむる也（「紫明抄」20頁下段）<sup>(5)</sup>

・えむすれは 怨也（「仙源抄」632頁）<sup>(6)</sup>

・ものえんし 心つきなく 物怨物うらみ也（「河海抄」222頁上段）<sup>(7)</sup>

・ゑんす 怨也 帚木物エンシラスルトアルハ疾妬也（「類字源語抄」170頁）<sup>(8)</sup>

・えんすれハ うらむる心也 怨すれハ（「一葉抄」28頁上段）<sup>(9)</sup>

なお、次に示すように訓点資料では、「怨」を「怨ズ」として訓じた例もある。ここでの意味は「女性が男性に嫉妬の念を抱く」という意味であろう。この点で、「源氏物語」の「怨ズ」の意味に通じるところがある。このような「怨」の訓読が「源氏物語」で使われる「怨ズ」に結びついたかどうかは明らかではない。本稿の筆者は、他の訓点資料では「怨」は「ウラム」と訓じられており、このような訓点資料の「怨ズ」と和文の「ゑんず」について、直接の結びつきは考えにくいのではないかと判断する。「源氏物語」の「怨ズ」の意味も、先に述べたようにすべての例に口外性が認められるという点も、周礼の「怨」の意味とは異なっている。なお、中国文献における「怨」の意味については、筆者の別稿をご参照いただきたい。<sup>(10)</sup>

・陰・礼とは男女之礼を謂フ。昏・姻時を以テスレは則、男曠

セ不女怨セ不也（『群書治要 一』周礼 卷第八十四行）<sup>(11)</sup>

## 二 「怨ズ」と「ウラム」に見られる口外性と心内性

ここでは、「怨ズ」と「ウラム」について、口外性と心内性という観点から、それぞれの意味の特徴について検討する。

さて、1の例は、同じ個所に「怨ズ」と「ウラム」が使われている例である。本稿の筆者は、この例の「怨ズ」は口外性を示し、「ウラム」は心内性を示していると考えている。

この箇所は、いわゆる帚木巻の雨夜の品定めといわれている場面、左馬頭が自分の妻のことについて語ったところである。「怨ズ」と「ウラム」の動作主体は左馬頭の妻である。ここでの「怨ズ」は、「見知れるさまにほめかし」とあるので、相手に浮気の真相を問いたすという行為を表していると考えられる。したがって、「怨ズ」に、口外性が認められる。一方、「ウラム」のほうは、「恨むべからむふしをも憎からずかすめなさば」とあり、「憎からずかすめなさば」という状態にとどまればよしとするという内容を述べている。「ウラム」はまだ「かすむ」（言葉にしてほめかす）状態には至っていないということなので、心内性を表していると考ええる。この場面につき、『源氏物語注釈 一』では、「怨すべきこと」は「ほめめかし」、「恨むべからむ節」については「かすめなさば」と表現しており、「怨ズ」と

「恨む」、「ほのめかす」と「かすめなす」がそれぞれ対をなしている。(中略)「怨すべきこと」は、怨嗟を言葉にして訴えて当然と思われる事物。即ち浮気沙汰。「恨むべからむ節」は、恨みを心の内に抱いて当然と思われる節(機会)(230頁3行目)と説明されている。また、「怨ず」の意味について、「言葉や態度であからさまに不満を示す行為の表現。「恨む」とは異なる」

(174頁13行目)と説明している。この内容から「怨ズ」に口外性、「ウラム」に心内性を認めてよいと考える。ただし、『源氏物語評釈 巻第二』<sup>(13)</sup>では、「怨ずは、心にうらめしく思うこと(玉の小櫛)、恨むは、恨みごとを口に出すこと(玉の小櫛)」(196頁5行目)と説明され、「玉の小櫛」では、「怨ズ」に心内性があり、「ウラム」に口外性があるような説明であることを指摘される。本稿の筆者は、「怨ズ」のほうに口外性を認める「注釈」の説が妥当であると考ええる。

ここでの「ウラム」のように、「源氏物語」の「ウラム」は、ほとんどの例が心内性を示す。しかしながら、『日本国語大辞典』の説明にあるように、「ウラム」にも口外性を示す例がある。そこで、次節では、「ウラム」と「怨ズ」が、関連し合う文脈の中で使われている箇所を中心に、「ウラム」と「怨ズ」がどのよう<sup>1</sup>に使い分けられているかということについて、口外性と心内性という観点も踏まえながら検討する。

1 すべて、よろづのことなだらかに、怨ずべきことをば見

知れるさまにほのめかし、恨むべからむふしをも憎からずかすめなさば、それにつけてあはれもまさりぬべし。(新編① 67頁15行目 帚木)

### 三 表現者と理解者という観点による「怨ズ」の意味の解釈

本節では、動作主体と動作対象の関係のほかに、表現者と理解者の関係という観点も取り入れて、「怨ズ」と「ウラム」の意味の違いについてみていく。なお、ここでいう表現者とは会話文では話し手であり、地の文では筆者である。結論としては、「怨ズ」には、すでに説かれている動作主体と動作対象の信頼関係のほかに、表現者と理解者の間に信頼関係があることを述べる。

以後、「ウラム」と「怨ズ」が同じような場面使われている例を取り上げ、表現者(話し手・筆者)の心理の流れについて解釈する。

以下の考察では、「怨ズ」が会話の中で使われており、話し手と聞き手の関係性が問題となる部分を含む場面と、「怨ズ」が地の文だけに使われており、筆者と読者の関係性が問題となる場面を区別して考察する。

### 三― 一 会話文中に使用された「怨ズ」を含む場面から

(1) 源氏が紫の上に明石の君との関係を明かす場面

後に示す1から4の例は、源氏が紫の上に明石の君との関係を明かす場面である。この場面の前後の文で使用された「怨ズ」と「ウラム」から、紫の上と源氏の心理的变化を読み解いてみよう。

用例1は、地の文に使われた「怨ズ」の例である。動作主体は紫の上で動作対象は源氏である。「面うち赤みて」とあることから、紫の上が源氏を非難する心が表に出ているとわかる。ただし、この場面では、源氏の態度として「いとよくうち笑みて」とあるように、憎しみの感情を伴うような夫婦間の深刻な喧嘩には至っていない。紫の上も一方的に源氏を非難するのではなく、「あやしう、常にかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、我ながらうとましけれ。」と、自分の嫉妬深い性格を責めている。後述することになるが、源氏と紫の上は信頼関係を基調としてゐる。「怨ズ」は動作主体と動作対象が信頼関係にあることを示す語でもある。地の文の「怨ズ」の例なので、「怨ズ」を使って表現した筆者の気持ちを読み解く必要がある。(なお、地の文の「怨ズ」については次項でも詳述する。)筆者が、紫の上の行為を「怨ズ」として表現することで、読者は、源氏と紫の上の信頼関係に基づく夫婦の会話のやり取りの場面として、安心しながら読み進めることができる。筆者が動作主体である紫の上に

寄り添いながら話を展開させていることを、読者は「怨ズ」という語から知ることができる。源氏の浮気という深刻な内容ではあるが、読者としては、それが大きく二人の關係に影を落とすことがないことを予測しながら読み進めて行くことができるのである。

2は1に続く源氏から紫の上への発言である。動作主体は紫の上で、動作対象は源氏である。「怨ズ」は、「もの憎み」という行為をさせるのは源氏の浮気が原因であると責める紫の上の行為を表現している。紫の上には源氏との間に子供がおらず、明石の君との關係を知らされた心情は穏やかではない。しかし、夫の行為を許し、夫婦間の難局を乗り越えていく力量が紫の上にはあり、源氏もその点で紫の上を信頼している。この信頼關係が、源氏と紫の上の間には一貫して存する。聞き手の紫の上は、源氏が発言の中で「怨ズ」を使ったことで、源氏が自分を信頼して受け止めていることを知る。この「怨ズ」は、源氏と紫の上の心の隔たりを示すのではなく、むしろ夫婦の信頼關係を示していると考えられる。2の紫の上の「思へば悲し」という発言や、「はてはては涙ぐみたまふ」という源氏の行動からも、深刻な夫婦間の憎しみや怒りを伴った言い争いの場面ではないことが分かる。源氏は、自らの発言のなかに「怨ズ」を使うことによって、紫の上の心を和らげ、穏やかに会話を進める効果を狙ったものと見ることができる。



3は2に続く場面に「怨ズ」が使われた例で、地の文での使用例である。動作主体は紫の上で動作対象は源氏である。「なかなか愛敬づきて腹立ちなしたまふ」「をかしう見どころあり」という表現から、「怨ズ」という行為が、相手と強く争うものではないことが分かる。「怨ズ」は、「愛敬づく」という要素として認められ得る行為である。また、「怨ズ」は、「をかし」「見どころあり」というプラスの評価の語とも使われている。3では、筆者が「怨ズ」を使うことによって、明石の君と源氏の関係が表面化してもなお源氏と紫の上の関係が信頼関係にあることを読者に伝えていと言え。筆者は紫の上の「怨ズ」という行為に及んだ紫の上に寄り添いながら話を展開させていと言え。読者も、このような筆者の意図に沿いながら紫の上と源氏との関係を理解することができる。

ところが、用例4では、地の文で「ウラム」が使われる。動作主体は源氏で、動作対象は紫の上である。3の場面の後、明石の姫君の五十日の祝いを機に、源氏は明石の君に、姫君を連れて上京して源氏の近くで住むように薦める手紙を書く。姫君の乳母からの手紙を見て、源氏のため息をつくのであるが、紫の上はそのため息を聞きのがさず、恨みがましい和歌を口ずさむ。紫の上の様子を見て、源氏は、「ただ昔のことを振り返っているだけなのに、なぜそのような態度を取るのか」と「ウラム」という行為に及ぶ。なお、ここで使われた「ウラム」には、源

氏の発言に直につづくことから、口外性が認められるところである。

紫の上と源氏との関係は、信頼関係を基調とするが、ここでの「ウラム」には、動作主体と動作対象の間に信頼関係は認めがたいであろう。源氏の紫の上への発言は、その場をとりつくるための嘘であり、実際には紫の上に内緒で、明石の君と娘を自分の近くに住ませ養育する計画を進めている。用例1から3までの場面では、たわむれといってもよいほどの穏やかな夫婦間の会話のやりとりであったが、明石の君や明石の姫君、その乳母が夫婦関係の間に現実的に入り込んでくる段階となり、ちよつとしたもめごとであった事態は、男女関係の深刻な出来事へと発展する。ここでの筆者は、虚偽の発言をする源氏に寄り添うことはできない。読者も、源氏の行為が「ウラム」で表現されていることにより、源氏と紫の上の心理的变化を理解し、今後の話の展開に不安を抱きながら読み進めていくことになる。

1 面うち赤みて、(紫の上)「あやしう、常にかやうなる筋のたまひつくる心のほどこそ、我ながら疎ましけれ。もの憎みはいつならふべきにか」と怨じたまへば、いとよくうち笑みて、(②291頁11行目 滯標)

2 (源氏)「そよ、誰かならはしにかあらむ。思はずにぞ見えたまふや。人の心より外なる思ひやりごととしてもの怨じなどしたまふよ。思へば悲し」とて、はてはては涙ぐみた

まふ。(②291頁13行目 滯標)

3 いとおほどかに、うつくしうたをやぎたまへるものから、さすがに執念<sup>しつね</sup>きところつきて、もの怨<sup>な</sup>じしたまへるが、なかなか愛敬<sup>あいぎやう</sup>づきて腹立ちなしたまふを、をかしう見どころありと思す。(②293頁12行目 滯標)

4 (源氏)「まことは、かくまでとりなしたまふよ、こはただかばかりのあはれぞや。所のさまなどうち思ひやる時々、来<sup>き</sup>し方<sup>かた</sup>のこと忘れがたき独り言<sup>ひとりご</sup>を、ようこそ聞きすぐいたまはね」など、恨<sup>み</sup>みきこえたまひて (②297頁1行目 滯標)

(2) 雲居雁と夕霧の関係をめぐる内大臣と大宮のやりとりの場面後の5から10に示す例は、雲居雁と夕霧の関係をめぐる内大臣と大宮、これに夕霧をまじえた、三者のやりとりの場面である。

5の例は、「ウラム」が地の文で使われた例である。動作主体は内大臣で、動作対象は大宮である。内大臣が、夕霧と雲居雁の監視が不十分であった大宮の行為を「ウラム」で表現している。大宮は、自らが住む三条邸で、雲居雁と夕霧を養育している。内大臣は、雲居雁を春宮の后にすることを希望していたところ、夕霧と雲居雁の関係を知ったのである。娘を春宮后にさせ、天皇家との結びつきを深めたい内大臣にとっては、雲居雁を夕霧に奪われることは大きな痛手である。ここでの「ウラム」

は、夕霧と雲居雁の関係を知った内大臣が、母の大宮の監督不行き届きを責める行為として表現されている。筆者は「ウラム」を使うことによって、内大臣が強い腹立ちの気持ちを抱いていることを読者に伝える。

6の例も、「ウラム」が地の文で使われた例である。動作主体は内大臣で、動作対象は大宮である。筆者は、5の場面で、内大臣の怒りにも似た気持ちを「ウラム」を使って読者に伝えたのであるが、一方の大宮は、雲居雁と夕霧の若い二人の恋心を肯定的に捉えている。むしろ、雲居雁の相手として、同等的な以上の人物として夕霧を認めている。筆者は、大宮のこのような心情を内大臣が知ったなら、いっそう「ウラム」であろうと読者に伝えている。

ところが、7の例では、大宮は、「ウラム」としていた内大臣の行為について、夕霧に対する会話の中で「怨ズ」を使っている。大宮は、夕霧と雲居雁の関係を知って内大臣が不満を述べていたことを夕霧に告げる。「怨ズ」の動作主体は内大臣で、動作対象は大宮である。大宮は、内大臣の母であり、雲居雁と夕霧の祖母である。文章中に「情なくこよなきことのやうに思しのたまへるを」と内大臣の行為が表現されているように、内大臣が大宮に向けられた行為は、「ウラム」に相当する行為であった、筆者が地の文で「ウラム」を使ったのは、内大臣のげしい口調が、「怨ズ」で表現される事態ではなかったからである。

しかし、ここでは、語り手の大宮は聞き手の夕霧に対して、内大臣の行為を「怨ズ」で表現している。ここで大宮が「ウラム」を使わず、「怨ズ」を使ったのは、聞き手である夕霧に安心感を与え、会話の場を穏やかに進めようと努めたからであろう。「怨ズ」で表現すれば、内大臣の行為は、信頼関係にある母と子で交わされた穏やかなものとなり、夕霧に過度な心配を与えずに済むのである。聞き手の夕霧に対する大宮の配慮が、「怨ズ」の使用に表れていると見ることができる。

ところが、これに続く8の場面では、夕霧は、大宮との会話の中で、内大臣の行為を「ウラム」と表現している。夕霧は、内思い当たることはあるものの、内大臣が「ウラム」ような行為はしていないと言う。ここで、夕霧は、大宮の発言中の「怨ズ」を「ウラム」に言い換えていることになる。これは、夕霧が、内大臣の行為を深刻な事態であるとして捉えたことを大宮に伝えているのではなからうか。そして、この夕霧の発言を聞いた大宮は、「よし、今よりだに用意したまへ」と、その場の会話を収めるのである。

9の例は、8から話が進んで、内大臣が雲居雁を大宮から引き取る場面である。ここでは、大宮から内大臣への会話の中で「怨ズ」が使われている。「怨ズ」の動作主体は内大臣で、動作対象は大宮である。娘の亡き後、その代わりのように手元で育ててきた雲居雁を手放すことは、大宮にとって大きな心の痛み

である。雲居雁を引き離す行為をする内大臣に対しては、不満を抱いているはずである。しかし、内大臣も我が子であり、その思いも十分に理解できる大宮ではある。ここで大宮が「怨ズ」を使ったのは、聞き手である我が子の内大臣に配慮し、事を荒らげないようにする意図によると考えられる。我が子から母への行為として「ウラム」を使えば、親子の間の信頼関係が壊れてしまう。それを大宮は求めなかったと見ることが出来る。内大臣も「深く隔て思ひたまふることはいかでかはべらむ。」「はぐくみ、人となさせたまへるを、おろかにはよも思ひきこえさせじ」という発言に見られるように、母を気遣っている。母は、我が子の気持ちを理解したうえで、「怨ズ」を使って、信頼関係を保ったのであろう。

10は、大宮から雲居雁への手紙の中で「ウラム」が使われている。動作主体は内大臣で、動作対象は大宮である。母の大宮は、雲居雁に別れの言葉を言うために自分の部屋に招く。先に述べてきたように、内大臣の大宮に対する行為は、基本的には「ウラム」である。ただし、大宮が夕霧に配慮したときや、大宮が内大臣に配慮したときには、「怨ズ」で表現していた。しかし、大宮は、孫にあたる雲居雁には、内大臣の行為を、「ウラム」という語で表現している。大宮は、場面によって「怨ズ」と「ウラム」を使い分けていることになる。ここで「怨ズ」ではなく「ウラム」を使っているのは、雲居雁を自分の手元から手放す原



因となった雲居雁の行為を諫める意図があつたのであろう。内大臣の不満を「怨ズ」で表現すれば、諫めという行為に及ぶことができない。大宮は、あえて雲居雁と少し距離を置いて、諫めることが必要であると考えている。雲居雁も、そのような大宮の気持ちを真摯に受け止める。お互いに「ウラム」という内大臣の行為を重く受け止めたうえで、祖母と孫とが対面しているからこそ、大宮は「泣きたまふ」（14行目）のであり、姫君も「ただ泣きにのみ泣きたまふ」（15行目）のである。

5 姫君は、いと幼げなる御さまにて、よろづに申したまへども、かひあるべきにもあらねば、うち泣きたまひて、いかにしかいたづらになりたまふまじきわざはすべからんと、忍びてさるべきどちのたまひて、大宮をのみ恨みきこえたまふ。（③46頁3行目 少女）

6 わが心ざしのまさればにや、大臣を恨めしう思ひきこえたまふ。御心の中を見せたてまつりたらば、ましていかに恨みきこえたまはん。（③46頁14行目 少女）

7 宮、例は是非知らずうち笑みて待ちよろこびきこえたまふを、まめだちて物語など聞こえたまふついでに、（大宮）「御事により、内大臣の怨じてものしたまひにしかば、いとなんいとほしき。」（③47頁7行目 少女）

8 （夕霧）「何ごとにかはべらん。静かなる所に籠りはべりにし後、ともかくも人にまじるをりなければ、恨みたまふ

べきことはべらじとなん思ひたまふる」とて、いと恥づかしと思へる気色を、あはれに心苦しうて、（大宮）「よし、今よりだに用意したまへ」とばかりにて、他事に言ひなしたまうつ。（③47頁13行目 乙女）

9 （大宮）「また、さもこそあらめ、大臣の、ものの心を深う知りたまひながら、我を怨じて、かく率て渡したまふこと、かしこにて、これよりうしろやすきことあらじ」とうち泣きつつのたまふ。（③52頁7行目 少女）

10 宮の御文にて、「大臣こそ恨みもしたまはめ、君は、さりともし心ざしのほども知りましたまふらん。」（③54頁4行目 少女）

（3）玉蔓と髭黒大将の結婚をめぐる源氏と紫の上の思いここでは、玉蔓と髭黒大将の騒動をめぐる場面での「ウラム」と「怨ズ」の使い分けについて確認する。

11の例は、「ウラム」が地の文で使われた例である。「ウラム」の動作主体は、髭黒大将の北の方で、動作対象は髭黒大将である。髭黒大将は、恋焦がれている玉蔓を引き取ろうとする。この例は、髭黒大将が、玉蔓を引き取ることを反対する北の方と口論する場面である。夫の薄情な行為に対して、北の方が起こした行動が「ウラム」である。ここでの北の方の行為は、男女間の強い憤りを示している。

12の例も、「ウラム」が地の文で使われた例である。髭黒の北

の方を式部卿宮が自邸に連れ戻したことに對して、鬚黒大將は式部卿宮に恨みごとを言おうと出かける。ここでの「ウラム」の動作主体は鬚黒大將で、動作対象は式部卿宮である、筆者は、鬚黒大將の腹立つ気持ちを「ウラム」で表現している。

13の例は、紫の上と源氏が会話をする場面で、会話中に「ウラム」と「怨ズ」が使われている。まず、紫の上は、源氏との会話の中で、式部卿宮が自分を恨んでいると想像できることを伝える。鬚黒大將が執心のあげく、玉鬘を自邸に引き取ろうとしているのは、親代わりの紫の上の策略だと思われるに違いないというのである。ここでの「ウラム」は、動作主体が式部卿宮で、動作対象が紫の上である。ここでの「ウラム」は、お互いの関係が心情的に隔たっている間柄で強い不満を抱く行為である。これに続く源氏から紫の上への会話では、「怨ズ」と「ウラム」が使われている。この場面の「怨ズ」と「ウラム」について『注釈六』では、「「怨ズ」は、言葉や態度であからさまに不満を示す意。「恨み」は、願いや期待が裏切られた際の表に出さない鬱積された不満。」と説明する。「怨ズ」の動作主体は、蛭兵部卿宮で、動作対象は源氏である。蛭兵部卿と源氏は異母兄弟であり、信頼に基づく良好な関係である。この例文中にも、兵部卿宮は、「さいへど、思ひやり深うおはする人にて」と源氏に評価されている。蛭兵部卿の宮は玉鬘への求婚者の一人で、玉鬘を養子として育てる源氏を「怨ズ」というのである。源氏

は、蛭兵部卿の行為を「怨ズ」で表現することにより、信頼関係にある人物からの行為であることを示し、聞き手の紫の上を安心させ、穏やかに会話を進めようとする意図があると考えられる。

ただし、源氏から紫の上への会話の中で、源氏は「恨みとけたまひにたなり」のように「ウラム」という表現も使っている。ここでの「ウラム」の動作主体は蛭兵部卿宮で、動作対象は源氏である。玉鬘への処遇は、求婚者である蛭兵部卿宮にとっては男女の感情と関わるのであり、実際は「ウラム」の対象でもあったと想像されるところである。しかし、「聞きあきらめて」「恨みとけ」と説明を重ねることによって、「怨ズ」の状況をより際立たせ、紫の上をより安心させる意図があつたのであろう。「おのづから、人の仲らいは忍ぶることと思へど、隠れなきものなれば」という実例を示すことによって、源氏は紫の上の不安を解消するのである。

14は地の文の「怨ズ」の例で、13から話が進んで、鬚黒大將の策略によって、玉鬘を自邸に迎え入れた後の場面である。動作主体は鬚黒大將で動作対象は玉鬘である。鬚黒大將は、帝と玉鬘が同室で対面し合ったことについて、玉鬘に不平をもち、この行為を、筆者は「怨ズ」を使って読み手に説明している。今や鬚黒大將と玉鬘は夫婦の関係である。動作主体と動作対象が夫婦の関係にあるので、「ウラム」を使わず、「怨ズ」を使つ

て表現するのが妥当であろう。ただし、動作対象である玉鬘は、「怨ズ」の動作主体の鬚黒大將に心を許していないようにみえる。つまり、動作主体と動作対象との間には、まだ信頼関係が成立していないのではないかと疑われる。ここでの「怨ズ」は、玉鬘の気持ちを読みそこなった、鬚黒大將の一方的な行為である。しかし、筆者は、この状況でも、鬚黒大將の行為を「怨ズ」で表現している。筆者は、二人の関係を、心の通じ合わない、修復不可能な関係であるとして読者に伝えようとしていない。むしろ、「怨ズ」で表現することによって、少なくとも鬚黒大將は玉鬘を信頼していることを示している。読者は、鬚黒大將の行為が「怨ズ」で示されていることによって、二人の関係が恋愛感情に基づいた憎しみ合いではないことを知る。そして、読者は、二人の将来が安定することを期待するのである。実際に、その後、鬚黒大將と玉鬘の間には子供が生まれ、鬚黒大將の死後も玉鬘は母親として生き抜いていくことになるが、鬚黒大將の庇護を受けて、玉鬘なりに幸福であろう前途を筆者は用意しているのである。

11 幼き人々もはべれば、とぎまかうぎまにつけておろかに  
はあらじと聞こえわたるを、女の御心の乱りがはしきま  
まに、かく恨みわたりたまふ。(③359頁10行目 真木柱)

12 宮に恨みきこえむとて、参でたまふまに、まづ殿にお  
はしたれば、木工の君など出で来て、ありしさま語りきこ

ゆ。(真木柱 ③377頁8行目)

13 春の上も聞きたまひて、(紫の上)「ここにさへ恨みらるる  
ゆゑになるが苦しきこと」と嘆きたまふを、大臣の君、い  
とほしと思ひて、(源氏)「難きことなり。おのが心ひとつ  
にもあらぬ人のゆかりに、内裏にも心おきたるさまに思し  
たなり。兵部卿宮なども、怨じたまふと聞きしを、さいへ  
ど、思ひやり深うおはする人にて、聞きあきらめ、恨みと  
けたまひにたなり。」(真木柱 ③380頁12行目)

14 かの入るゐさせたまへりしことを、いみじう怨じきこえ  
させたまふも、心づきなく、なほなほしき心地して、世に  
は心とけぬ御もてなし、いよいよ気色あし。(真木柱 ③390  
頁1行目)

#### (4) 春宮と匂宮と大夫の君の関係

15 の例は、匂宮から大夫の君への会話で引かれた歌の中で  
「ウラム」が使われた例である。「ウラム」の動作主体は宮の御  
方で動作対象は匂宮である。歌の中で使われているので、匂宮  
自身の言葉として語られた発言ではないが、「恨みて後」は匂宮  
の気持ちを表していることと見ることができる。大夫の君(若宮)  
が渡した紅梅を匂宮はうれしく受け取ったが、匂宮は大夫の君  
に宮の御方との仲介を期待しており、宮の御方との対面の後に  
渡された紅梅だったらよかったのと言うのである。この場面

では、匂宮から宮の御方への強い恋愛感情に基づく発言であることから、「怨ズ」より「ウラム」のほうがふさわしい。

16は、真木柱から大納言への会話で「怨ズ」が使われた例で、宮中から退出した真木柱が夫の大納言に宮中の出来事を語る場面である。ここでの「怨ズ」の動作主体は春宮で動作対象は大夫の君である。15にあるように、匂宮と大夫の君はひそかに会っていたが、そのときの匂宮の移り香が、大夫の君から匂ってきたので、春宮は大夫の君と匂宮の密会に気づいた。「怨ズ」は、春宮は、大夫の君をそばから離さないほど信頼している。

「怨ズ」は、そのような間柄で行われた行為である。「気色とり」「をかしかりしか」という真木柱の言葉からも、春宮は大夫の君に対して、憎しみを抱くような感情はないことが分かる。話し手の真木柱と聞き手の按察大納言は夫婦であって、お互いに親しい間柄である。真木柱が、大納言との会話の中で「怨ズ」を使ったことにより、大納言は不安感を抱くのではなく、むしろ春宮と大夫の君の良好な関係を知り、安心できたはずである。北の方の真木柱は大納言との会話を穏やかに進めることを意図して、「怨ズ」を使ったと考えられる。

15 (匂宮) 「我をば人げなしと思ひ離れたるとな。ことわりなり。されど安からずこそ。古めかしき同じ筋にて、東と聞こゆなるは、あひ思ひたまひてんやと忍びて語らひきこえよ」などのたまふついでに、この花を奉れば、うち笑

みて、「恨みて後ならましかば」とて、うちも置かず御覧す。

(⑤ 50頁12行目 紅梅)

16 (真木柱) 「若君の、一夜宿直して、まかり出でたりし匂ひのいとをかしかりしを、人はなほと思ひしを、宮のいと思ほし寄りて、兵部卿宮に近づききこえにけり、むべ我をばすさめたりと、気色とり、怨じたまへりしこそをかしかりしか。」(⑤ 53頁15行目 紅梅)

(5) 女性について源氏が紫の上に語る場面

17は、源氏から紫の上の会話で、「ウラム」と「怨ズ」が使われた例である。源氏は、自分と関わった女性たちについて評価するのであるが、ここは、六条御息所について、紫の上に語る場面である。一文のなかで「ウラム」と「怨ズ」が使われている。どちらも動作主体は六条御息所で、動作対象は源氏である。六条御息所と源氏の関係は、恋愛感情による憎しみの感情を基調とすることから、「ウラム」で表されるのがふさわしいであろう。そこで源氏は、まず「ウラム」を使って、六条御息所の行為を表した。しかし、源氏は、すぐに「怨ズ」を使って六条御息所の行為を表す。ここで、源氏は、「怨ズ」を使うことによって、六条御息所との関係を信頼に基づくものであることを聞き手である紫の上に示したことになる。この「怨ズ」という語は、源氏と六条御息所の関係には適さない。後に紫の上が発病した

折に、この源氏の発言を、物の怪となって現れた六条御息所は、「その中にも、生きての世に、人よりおとして思し棄てしよりも、思ふどちの御物語のついでに、心よからず憎かりしありさまをのたまひ出でたりしなむ、いと恨めしく。」(④236頁12行目)と、不満を述べる。源氏の紫の上への発言が作りごとであると責める。特に「怨ズ」を使ってお互いに信頼関係があるかのように装ったことを責めたのであろう。

源氏はこの場面で、女性に関わる回想を語るにあたり、紫の上との会話を穏やかに進めたいと考えていた。妻に女性との関わりを伝えるのであるから、源氏にとっては、非常に気を遣い、言葉を選びながら話を進行していく必要がある。聞き手への細やかな心遣いが、ここでの「怨ズ」の使い方に表れているとみることができる。源氏としては、「ウラム」という語を使つたままで、紫の上との会話を続けることはできなかったであろう。六条御息所が源氏に行つた行為を「怨ズ」で示すことによって、六条御息所の行為が恋愛感情に基づく憎しみではなくお互いの間に築かれた信頼関係に基づいたものであったことを紫の上に示し、紫の上に安心感を与え、穏やかに話を進めようとする意図が源氏にはあったのである。

この源氏の発言の最後は、「さらに、ここから見れど、御ありさまに似たる人はなかりけり」(211頁6行目)と、最高の評価を述べる。この後、紫の上は発病し、危篤状態になる。その後回復

はするが、紫の上は、この源氏の評価を受けたまま、その後、徐々に死へと向かつていくことになる。

17 恨むべきふしぞ、げにことわりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。心ゆるびなく恥づかしくて、我も人もうちたゆみ、朝夕の睦びをかさはさむには、いとつつましきところのありしかば、うちとけては見おとさるることやなど、あまりつくろひしほどに、やがて隔たりし仲ぞかし。(④209頁9行目 若菜下)

(6) 匂宮と八の宮の姫君の仲介をする薫

18の例は、薫から大君への会話のなかで、「ウラム」と「怨ズ」が使われた例である。話し手は薫で聞き手は大君である。「ウラム」と「怨ズ」の動作主体は匂宮で、動作対象は薫である。話し手の薫と聞き手の大君の関係は、亡き八の宮から行く末のことを頼まれた親しい間柄である。また、薫と匂宮も、お互いに親しく話し合えるような親しい間柄である。「ウラム」は、匂宮が薫と大君の関係を憶測して、恋の悩みを薫に訴えかけることを言う。匂宮の恋情の訴えに対して、八の宮の姫君たちからは、あまりよい返事が得られなかったので、匂宮の感情は高ぶるばかりである。薫は、大君に対して「ウラム」という表現で、匂宮の真剣さを伝える。「ウラム」には、尋常ではないような匂



宮から薫への憤りの態度が表される。

しかし、薫は、同じ会話の中で匂宮の行為を「ウラム」のままにせず、「怨ズ」という表現に変える。話し手の薫は、大君の気持ちに匂宮に向けたという意図があり、それに適した語を選んだと考えられる。「怨ズ」は、信頼関係に基づく間柄で行われる行為である。匂宮から薫への行為は、基本的には穏やかなものであって、匂宮が信頼するに足る人物であることを大君に伝えた。薫は「怨ズ」と表現することによって、大君の気持ちに穏やかにしながら、恋の仲介という役目を果たそうとする。信頼関係にあることを示す「怨ズ」を使って、聞き手の大君との心的距離を縮めながら説得を試みる薫の意図をこの会話中の「怨ズ」にみることができ、薫は、まず「ウラム」を使って、大君の気持ちを会話に惹きつけ、その後、「怨ズ」という表現に変えることにより、会話内容を荒らげず穏やかに進めようとした。結局、薫の策略は功を奏し、大君は「うち笑ひたまへるも」(208頁13行目)とあるように、大君は穏やかな態度をとることになるのである。

19は、18から話が進んだ場面で、地の文で「ウラム」が使われている。動作主体は匂宮で動作対象は薫である。匂宮は、相変わらず八の宮の姫君とはうまくいかず、その原因として薫の仲介が悪いからだとなおも薫を責める。ここで筆者が「ウラム」を使っているのは、八の宮の姫君への恋情を強め、薫にその仲

介を依頼し続ける匂宮の行為は、「ウラム」であることを、読者に伝える。筆者としては、「怨ズ」ではなく「ウラム」を使うことによって、執拗な態度をとり続ける匂宮からは、離れた立場に立って物語を進めている。読者は、「ウラム」で説明される匂宮に対して、何を起こすかわからないという不安を抱くことになる。

18 (薫)「宮のいとあやしく恨みたまふことのはべるかな。

あはれなりし御一言をうけたまはりおきしまなど、事のついでにもや漏らしきこえたりけん、また、いと隈なき御心の性にて、推しはかりたまふにやはべらん、ここになむともかくも聞こえさせなすべきと頼むを、つれなき御気色なるは、もて損ひきこゆるぞとたびたび怨じたまへば、心より外なることと思ひたまふれど、里のしるべ、いとこよなうもえあらがひきこえぬを、何かは、いとさしももてなしきこえたまはむ。」(⑤206頁14行目 榎本)

19 御心にあまりたまひては、ただ中納言を、とぎまかうさまに責め恨みきこえたまへば、をかしと思ひながら、いとうけぱりたる後見顔にうち答へきこえて、あだめいたる御心ざまをも見あらはす時々は、(⑤215頁一行目 榎本)

(7) 中の君と匂宮の絆

20は地の文に使われた「ウラム」と「怨ズ」の例である。浮

舟を一目見て気になっている匂宮は、妻の中の君の嫉妬によって浮舟と匂宮の仲を妨げられていると責める。これに対して、中の君は、真実を匂宮に伝えたいと思う。「ウラム」の動作主体は匂宮で動作対象は中の君であり、「怨ズ」の動作主体は中の君で動作対象は匂宮である。中の君と匂宮とは夫婦の間柄である。中の君は、事態が深刻になる予感のもと、その場を荒らげず、穏やかに収めるために、はっきりと真相を明かしたいという思いを押し込めて、その場を繕って、夫婦の信頼関係を保ちながら、穏やかに会話を進めようとする。薫からの懸想や、匂宮と六の君との結婚など、中の君の気持は穏やかではなかったが、実子も生まれ、安定した状態に収まりつつあった。そこに降って湧いたように浮舟と薫の関係が生じ、さらに匂宮の今後の行動が危惧されたが、今の中の君にとって、もはやそれらの原因によって夫の匂宮との関係が損なわれることはない。そこまで、中の君と匂宮の関係は、もはや安定していることを、筆者は「怨ズ」という表現によって、読者に伝えている。この「怨ズ」という表現をとおして、読者は、浮舟の存在が中の君と匂宮の夫婦関係を根本から壊すことはないだろうということを予測しながら読み進めることもできる。ただ、一方で、中の君と匂宮の夫婦仲の安定は、浮舟の悲劇を誘発していく要因の一つとなるのである。

21の例は、匂宮から中の君への会話のなかで「怨ズ」が使わ

れた例である。「怨ズ」の動作主体は中の君で、動作対象は匂宮である。20でも述べたように、匂宮と中の君の夫婦関係には、基調として信頼がある。夕霧の娘の六の君という正妻ができてもお、匂宮は中の君を妻の一人として愛し続ける。匂宮は、信頼関係を示す「怨ズ」を使うことによって、聞き手の中の君との会話を穏やかに進めていこうとしている。他者からの手紙を見られることは、見られた側にとっては嫌なことであるが、匂宮が見る手紙は、中の君がいずれかの女房と取り交わしている手紙であって、それを見ることによって、妻の心情を大きく害しないだろうとも匂宮は考えている。いわば、戯れに似た夫婦の会話である。動作主体の匂宮と動作対象の中の君はすでに信頼関係で結びついており、中の君は匂宮に手紙を見せるつもりでいる。気心の知れた信頼する間柄で成り立つ行為であるという「怨ズ」の特徴は、この場面でも見ることができる。

これに対して22に使われた地の文の「ウラム」は、男女の恋情の行き違いに基づく、憤りの感情を示す。「ウラム」の動作主体は匂宮で、動作対象は中の君である。先に述べたように、匂宮と中の君は、信頼関係で結びついている。ただ、ここでの「ウラム」は、匂宮の恋情の対象である浮舟を隠したと疑うことによる憤りの気持ちを表す。また、ここでの「ウラム」は、匂宮が中の君に対して抱く本当の気持ちではなく、浮舟に逢ったことを妻に隠すための方便として、偽りの行動を表している。

筆者は、浮舟に逢って高ぶる気持ちや、薫と浮舟の仲を知らされなかった悔しさなど、匂宮の気持ちを「ウラム」で表現している。薫と浮舟の心の通じ合いを疑う匂宮でもある。中の君も、夫の匂宮に信頼を寄せながらも、大君や薫の画策で匂宮の妻になった経緯などを思い出し、自分の薄幸を嘆く。筆者は、このような中の君の気持ちが分ならず、一方的に中の君を責める匂宮に対して、匂宮とは一時的ではあるが、少し離れた位置を保ちながら、「ウラム」を使って薫と中の君の仲を疑う匂宮の行為を描いている。ここで匂宮の行為が「ウラム」で表現されたことにより、読者は、二人の関係が今後どうなっていくのか気にしながら読み進めていくことになる。

20 人柄のまめやかにをかしうもありしかなど、いとあだなる御心は、口惜くちをしくてやみにしこととねたう思さるるままに、女君をも、(匂宮)「かうはかなきことゆゑ、あながちにかかる筋のものを憎みしたまひけり。思はずに心憂こころうし」と辱はづかしめ恨みきこえたまふをりは、いと苦しうて、ありのままにや聞こえてましと思せど、「(中略 中の君の心情)」と思ひ返したまひつつ、いとほしながらえ聞こえ出でたまはず、ことざまにつきづきしくは、え言ひなしたまはねば、おしこめてもの怨えんじしたる世の常の人になりてぞおはしける。(⑥105頁7行目 浮舟)

21 (匂宮)「開あけて見むよ、怨えんじやしたまはんとする」との

たまへば(⑥110頁9行目 浮舟)

22 かの人見つけたることは、しばし知らせたてまつらじと思せば、異ことざまに思はせて恨にくみたまふを、ただ、この大將の御事をまめまめしくのたまふと思すに、人やそらごとをたしかなるやうに聞こえたらむなど思す。(⑥139頁6行目 浮舟)

### 三―二 会話文中の「怨ズ」を含まない場面から

今までは、会話文で使用された「怨ズ」の例が含まれた場面について、話し手と聞き手の心情的な関係性を中心にみてきた。その説明の流れの中で、地の文に使われた「怨ズ」についても触れてきたが、ここでは会話文中の「怨ズ」を含まない文脈を取り上げ、再度、筆者と読者との関係について考察する。会話文中の「怨ズ」は、動作主体と動作対象の信頼関係を保証しながら、話し手が聞き手の気持ちに配慮しつつ、会話を穏やかに進めていこうとする意図が込められていることを確認した。このように考えれば、地の文の「怨ズ」の使用についても、筆者と読者の間に同じような関係が存すると考えられる。この点について、以下、具体例を挙げながら確認したい。

(1) 空蟬と関わる源氏の発言の場

23 は、地の文で「ウラム」が使われている。動作主体は源氏

で、動作対象は空蟬である。源氏と空蟬が契った後、空蟬のつれない態度や発言に、源氏が取った行動を「ウラム」で表現している。ここでの「ウラム」は、引用を表す「と」に続くことから、口外性を表しているといえる。源氏の空蟬への非難的な発言やそれに続く空蟬の応酬の背景にあるのは、男女間の恋愛感情にかかわる憤りである。

これに対して、24は、地の文で「怨ズ」が使われている。後朝の別れの後、手紙のやり取りさえできない空蟬に向けて、源氏は空蟬の弟の小君に手紙を託した。しかし、小君は手紙を姉の空蟬に渡すことができず、源氏の使いを果たせなかった。その小君に対して、源氏が不平を言う場面で「怨ズ」が使われている。「怨ズ」の動作主体は源氏で、動作対象は小君である。小君と源氏は、後に「まことに親めきてあつかひたまふ」(106頁12行目)とあるように親子のような信頼関係にある。筆者は、「怨ズ」を使うことによって、空蟬との逢瀬を小君に託し、恋の成就に向かってひたすら努力し続ける源氏の立場に立つて、応援する気持ちを読者に伝えているのではなからうか。空蟬に対する源氏の行為は非道ともいえるものであった。源氏が空蟬に行った行為に対しては「怨ズ」で表すことはできなかった。しかし、空蟬の弟の小君を大切に扱う源氏の行動は、非道な行いの代価のような役割を担っているのではなからうか。「怨ズ」という語で源氏の行為を表現することによって、人間的な源氏に

引き戻しつつ、源氏に対する興味関心が一層深まるよう読者を導いているのではないだろうか。

23 (源氏)「むげに世を思ひ知らぬやうにおぼれたまふなむいとつらき」と恨みられて(①102頁8行目 帚木)

24 (源氏)「昨日<sup>きのふ</sup>待ち暮らししを、なほあひ思ふまじきなり」と怨<sup>はん</sup>じたまへば、顔うち赤めてゐたり。(①108頁3行目 帚木)

(2) 結婚の儀式が間近の源氏と紫の上が会話する場面

25は地の文の「怨ズ」の例で、訪れが途絶えがちな源氏に対してすねた態度をとる紫の上に対して、源氏が「怨ズ」という行為を取った場面である。「怨ズ」の動作主体は源氏で、動作対象は紫の上である。源氏と紫の上の関係は、前述したように信頼を基調とする。ここでの「怨ズ」が、怒りや腹立ちのような憤りの気持ちに基づく行為ではないことは、「らうたく見たてまつりたまひて」とあることから分かる。また、「慰めきこえたまへど」のように、「怨ズ」という行為を取る紫の上を、源氏はその場に留まってなだめてもいる。このことから、「怨ズ」という行為によって紫の上と源氏の信頼関係が壊れてしまうことはない。そして、最後には「いとどらうたげなり」と、紫の上を評価する表現で終えている。筆者は、源氏の行為を「怨ズ」で表現することによって、源氏と紫の上が信頼関係にあること

を読者に伝えるとともに、筆者自身は源氏側に立ちつつ、読者を源氏に惹きつけている。

26は、地の文の「ウラム」の例である。動作主体が源氏で動作対象が紫の上である。紫の上の「こよなう疎みきこえたまひて」という態度に対して、源氏が紫の上に憤りの心情を吐露している。源氏と紫の上は信頼関係で結ばれ、「怨ズ」という行為で表される間柄である。

それでは、なぜ、26における源氏の行為が「ウラム」で表現されているのであろうか。その理由は、紫の上に対する源氏の心情の変化を筆者が表現していると考ええる。25のほうは、「などかくいぶせき御もてなしぞ。おはしけれな。」と、親が子を教えるような表現が使われているのに対して、26では、「馴れはまさらぬ御気色の心うきこと」のように、夫になる身として残念な気持ち吐露されており、「年ごろ思ひきこえし本意」のように、源氏の深い愛情を吐露している。「ありしもあらずなりたまへる御ありさま」とあるように、源氏を拒む態度をいつまでも変えない紫の上に対する源氏の心の変化を、「怨ズ」から「ウラム」に変えて表現しているのではなからうか。当初、親のような庇護的な視点で紫の上に接していた源氏が、やがて夫としての視点に変化した心のあり様を、筆者はこの「怨ズ」から「ウラム」へと語を変えることによって、読者に伝えていると考えられる。読者も、「ウラム」という語によって、源氏の気持の変

化を察知するとともに、源氏と紫の上の将来への不安を掻き立てられるのである。その後、一時的にはあるが、筆者は源氏を紫の上から離れさせ、須磨の地へと導いて行くことになるのである。

25 (源氏)「あな、うたて、これはいとゆゆしきわざぞよ」とて、よろづにこしらへきこえたまへど、まことにいとつらしと思ひたまひて、つゆの御答へもしたまはず。(源氏)「よしよし。さらに見えたてまつらじ。いと恥づかし」など怨じたまひて、御硯あけて見たまへど物もなければ、若の御ありさまや、とらうたく見たてまつりたまひて、日ひと日入りゐて慰めきこえたまへど、解けがたき御気色いとどらうたげなり。(②72頁5行目 葵)

26 女君はこよなう疎みきこえたまひて、年ごろよろづに頼みきこえて、まつはしきこえけるこそあさましき心なりけれ、と悔しうのみ思ひて、さやかにも見あはせたてまつりたまはず、聞こえ戯れたまふも、いと苦しうわりなきものに思ひ結ばれて、ありしもあらずなりたまへる御ありさまを、をかしうもいとほしうも思されて、(源氏)「年ごろ思ひきこえし本意なく、馴れはまさらぬ御気色の心憂きこと」と恨みきこえたまふほどに、年もかへりぬ。(②77頁5行目 葵)



(3) 朝顔の姫君に執心する源氏に紫の上が悩む場面

27は、「怨ズ」が地の文で使われた例である。朝顔の姫君に惹かれつづける源氏に対して、紫の上は、表面にはあからさまには出さないが、心の中では、自分を取るに足らないもの、源氏の愛情の受け手にはならないものとして、悩み続ける。「怨ズ」の動作主体は紫の上で、動作対象は源氏である。「よろしきことこそ、うち怨じなど憎からずきこえたまへ、まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず」とあるように、「怨ズ」は、憎しみ合うような深刻さのない場面で、動作対象に対して、動作主体が不満の気持ちを言葉にして表に出す行為を表す。源氏と紫の上は、信頼関係で結びついている。筆者は、朝顔の姫君と源氏との関係に心が揺れる紫の上の行為を「怨ズ」と表現することによって、紫の上が源氏との信頼関係を損なうほどの気持ちではないことを読者に伝えているといえよう。「怨ズ」が使われていることによって、読者は、安心して、紫の上に寄り添い、読み進めることができるのである。

28の例は、地の文に使われた「怨ズ」の例である。27の例から話が進み、源氏が朝顔の君に恋情を訴えかける場面である。ここでの「怨ズ」の動作主体は源氏であり、動作対象は朝顔の姫君である。源氏は「怨ズ」という行為をしたことを、「いと若々しき心地したまへば」とあるように、大人げない行為であったと反省している。源氏は、「怨ズ」という行為をしたので

あるが、それがこの場にふさわしくなかったと思い、「漏らしたまふなよ」と朝顔の姫君に付言する。このことから、源氏と朝顔の姫君は、信頼関係にあるといえよう。ただし、軽はずみな行為であったために後悔しているのであり、「怨ズ」という行為が許されるほどの信頼関係ではなかったということになる。

筆者は、「怨ズ」を使うことによって、朝顔の姫君に求愛する源氏に寄り添いながら、源氏の葛藤を読者に伝えている。朝顔の姫君への求愛のために行った「怨ズ」という行為は、源氏の真剣さを読者に伝える。このことにより、読者は、源氏と朝顔の姫君の関係が、「ウラム」で表現されるような、愛憎に発展する関係ではないことを知ることができ、安心できるのである。

29の例では、28と同じ朝顔の巻で、地の文に「ウラム」が使われている。動作主体は藤壺で、動作対象は源氏である。亡くなった藤壺の姿が源氏の夢に現れる。藤壺は、源氏との密事が露見したことを非難する。ここで、筆者は、源氏と藤壺の関係は、「ウラム」であって「怨ズ」ではないことを読者に伝える。「ウラム」は、恋愛関係にある男女間の憤りの感情を基調とした行為である。「などかくは」とあるように、源氏は、添い寝する紫の上の驚きの言葉で現実に戻される。藤壺との「ウラム」の関係に怯える源氏が、「怨ズ」の関係の紫の上に救われるという、「ウラム」と「怨ズ」の関係を示す象徴的な場面であるといえる。この場面で、筆者が藤壺の行為に対して「ウラム」を

使ったことにより、読者は紫の上と源氏の関係が、「ウラム」ではなく「怨ズ」という行為が許し合える信頼関係にあることを確認することができるであろう。

27 かき絶えなごりなきさまにはもてなしたまはずとも、いとものはかなきさまにて見馴れたまへる年ごろの睦び、あなづらはしき方にこそはあらめ、などさまさまに思ひ乱れたまふに、よろしきことこそ、うち怨じなど憎からずきこえたまへ、まめやかにつらしと思せば、色にも出だしたまはず。(②479頁5行目 朝顔)

28 言ふかひなくて、いとまめやかに怨じきこえて出でたまふも、いと若々しき心地したまへば、(源氏)「いとかく世の例になりぬべきありさま漏らしたまふなよ、ゆめゆめ。いさら川なども馴れ馴れしや」とて、切にうちささめき語らひたまへど、何ごとにかあらむ。(②486頁11行目 朝顔)

29 入りたまひても、宮の御事を思ひつつ大殿籠れるに、夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたまへる御気色にて、(藤壺)「漏らさじとのたまひしかど、うき名の隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、つらくなむ」とのたまふ。御答へ聞こゆと思すに、おそはるる心地して、女君の「こは。などかくは」とのたまふにおどろきて、いみじく口惜しく、胸のおきどころなく騒げば、おさへて、涙も流れ出でにけり。(②494頁15行目

#### 朝顔

##### (4) 薫と大君の顚末

30は、地の文に使われた「ウラム」の例である。「ウラム」の動作主体は薫で、動作対象は大君である。薫は、大君を恋慕しているが、大君はそれに応じない。弁の君の導きなどもあり、薫は、夜、大君のもとに忍びよるが、大君は事情を知らない中の君を残してその場を逃げ去っていた。薫はそのことに気づき、中の君と語り合うだけで夜を過ごす。薫は、弁の君に、手配の悪さを責め、この件を誰にも言わないようにと説得して早々に自分の居所に帰る。次の日、薫のもとから、「慕っているのは大君の方である」という内容の和歌が書かれた後朝の文が大君に届く。筆者は、薫が大君に対する恋情が思いどおりにならない腹立ちを「ウラム」で表現した。相手の脱出という屈辱的ともいえる行為を受けた薫の気持ちは「ウラム」に相当する。

31は地の文に「怨ズ」が使われた例で、動作主体は薫で、動作対象は大君である。大君から自分のもとに送られてきた和歌に興味を感じられて、それを見ると薫は「怨じはつ」ことができな。30の例では、薫の行為に対して筆者は「ウラム」を使っていた。これに対して、31では、筆者は薫の行為を「怨ズ」で表現している。薫と大君の関係は、故八の宮の遺言に基づく信頼関係にある。薫の大君への一途な思いは、弁の君の手配の悪

さと大君の行動によって、実現することはなかった。それは、薫にとっては一時的に「ウラム」に相当することであったが、大君の返歌により、信頼関係が取りもどされたことを「怨ズ」で表現している。筆者は「怨ズ」を使って表現することで、薫と大君の信頼関係が、大君の脱出事件後でもなお、続いていることを読者に伝える。この事件を読み進めてきた読者としては、屈辱的ともいえる行為を受けた薫とかたくなに拒み続ける大君との関係は、どういう結末に至るのであるかと、心配しながら読み進めるが、「怨ズ」が使われることによって、二人の信頼関係はまだ壊れていないことを知り、安心するのである。また、嫌われても恋慕し続ける「まめ人」としての薫の人物像も再確認されるであろう。

32では、地の文に「ウラム」が使われている。薫が匂宮と中の君を結婚させ、自分は大君と添い遂げようとするたくらみの顛末の中で使用された「ウラム」である。「ウラム」の動作主体は薫で、動作対象は大君である。薫は大君に恋慕の情を訴え続けるが、大君は、薫の気持ちを受け止めようとしめない。そのような大君に対する薫の行為が「ウラム」で表現される。筆者は、薫の恋情にもとづく憤りを「ウラム」という語で読者に伝えている。大君を慕い続け、中の君を匂宮と結婚させる企てをし、匂宮を中の君のもとに導いた薫に対して、筆者は寄り添いつづけることはできない。先の31の箇所の「怨ズ」で安心した読者

ではあったが、薫の行為が再び「ウラム」で表現されたことにより、この先の薫と大君の關係に不安を抱かざるを得なくなる。この後、大君は悲嘆し、宇治の地で若くして死に至るのであるし、薫の心にも影を落とし続けることになる。

30 秋のけしきも知らず顔に、青き枝の、片枝いと濃くもみぢたるを（薫）おなじ枝を 分きてそめける 山姫に いづれか深き色とはばや さばかり恨みつる気色も、言少ななことそぎておしつみたまへるを、そこはかともなくもてなしてやみなむとなめりと見たまふも、心騒ぎて見る。

（⑤257頁9行目 総角）

31 （大君）山姫の 染むる心は 分かねども うつろふ方や深きなるらん ことなしびに書きたまへるが、をかしく見えければ、なほえ怨じはつまじくおぼゆ。（⑤258頁2行目 総角）

32 （薫）「いかに。こよなく隔たりてはべるめれば、いとわりなうこそ」など、よろづに恨みつつ、ほのぼのと明けゆくほどに、昨夜の方より出でたまふなり。（⑤268頁6行目 総角）

（⑤）六の君のことで、匂宮と中の君が語らう場面

33は地の文で「ウラム」が使われた例である。動作主体は中の君で、動作対象は匂宮である。匂宮と夕霧の六の君の結婚が

決まり、中の君の心は不安である。近くにいる女房達は、「愛情が覚めることはない」などと、口々に言い合うのに対し、筆者は、「ウラム」ことをこのまま続けるつもりでいるのかと、中の君に問いかける。「ウラム」は恋情に基づく憤りの気持ちを表す語である。ここで、読者は、「ウラム」と表現されていることによって、中の君と匂宮の二人の今後の関係が不安になるであろう。しかし、筆者は、後に「怨ズ」を使って、二人の間に信頼関係が続くことを示唆する。

34は、地の文に「怨ズ」が使われた例である。動作主体は中の君で、動作対象は匂宮である。匂宮は中の君にやさしく、二人は穏やかに暮らしていたが、匂宮が夕霧の六の君と結婚し、さらにまだ薫に強引に言い寄られ、薫の移り香によって夫の匂宮に二人の面会が気づかれてしまうなど、中の君の心は落ち着かない。そこへ、薫から宇治訪問の報告が中の君に届いた。夫の匂宮もその報告書を見ることになる。薫と中の君の仲を疑っている匂宮は、心穏やかでなく、中の君に皮肉めいた言葉を言いかける。中の君は、薫の報告文に、薫との仲を疑われるような内容がなかったので安心する一方、匂宮に「怨ズ」という行為を取るのである。中の君と匂宮の間には、夫婦の信頼関係を損ないかねない様々な出来事があったが、ここで筆者が「怨ズ」で表現していることによって、読者は二人の関係がまだ信頼関係にあると確認できる。実際、中の君は、この後も匂宮に大切

にされ、男児を産み、母として幸せな生涯を送ることになる。

33 (女房)「さ言へど、もとの心ざし深く思ひそめつる仲は、なごりなからぬものぞ」など言ひあへるも、さまざまに聞きにくく、今は、いかにもいかにもかけて言はざらなむ、ただにこそ見めと思さるるは、人には言はせじ、我ひとり恨みきこえんとにやあらむ。(⑤405頁4行目 宿木)

34 女君は、事なきをうれしと思ひたまふに、あながちにかくのたまふをわりなしと思して、うち怨<sup>はぐ</sup>じてあたまへる御さま、よろづの罪もゆるしつべくをかし。(⑤464頁3行目 宿木)

#### 四 ま と め

本稿では、漢語動詞「怨ズ」を取り上げ、動作主体と動作対象の関係性という観点に加えて表現者と理解者の関係性という観点からも、「怨ズ」の使用意図について考察してきた。ここで、漢語動詞という表現をしたのは、さらにこれらに加えて漢語動詞であることの特徴をとらえる目的もあったからである。したがって、方法として、「ウラム」という類義の和語動詞と比較することにした。

まず、「怨ズ」には口外性が認められることを確認した。これに對して「ウラム」は、心内性を意味の中心としながら、時に

口外性も認められる。したがって、「怨ズ」と「ウラム」の意味の違いを明らかにするために、口外性の「怨ズ」と口外性の「ウラム」を比較した。

動作主体と動作対象の観点からの結論をいえば、「怨ズ」には両者の間に信頼関係を基調とした心的関係性が認められるといえる。これに対して「ウラム」は、恋愛関係に基づく愛憎が意味の中心であることから、憎しみや怒りを伴う行為を表す。

表現者と理解者とは、会話文では話し手と聞き手の関係であり、地の文では筆者と読者の関係であるが、両者の間にも心的な関係があり、表現者には「怨ズ」を使うことによって、話を穏やかに進めていく意図が認められる。時として、「ウラム」と「怨ズ」の両方を組み合わせて使うことによって、信頼性に基づく行為を示す「怨ズ」の効果を発揮している。「源氏物語」において、「怨ズ」を使用することにより、源氏と紫の上以外の動作主体や動作対象においても、読者に源氏と紫の上の関係を想起させるという効果がある。「怨ズ」によって、源氏と紫の上の関係が、物語の基調として「源氏物語」の至る所に張り巡らされているのである。「怨ズ」と「ウラム」の使い方によって、動作主体と動作対象の心的人物関係が示されるのであり、それは両者の運命をも理解者に予想させるという効果を有している。このように、漢語動詞「怨ズ」と和語動詞「ウラム」は、両語が互いにその特性を生かし合いながら使用されており、「源氏物

語」の内容を重厚なものにしている。

なお、このような「怨ズ」の意味には、漢語の特質が活かされているであろう。漢語は和語に比べて意味が限定的であるという特徴がある。「怨ズ」が動作主体と動作対象を限定することは漢語の特徴をよく示している。漢語動詞を使うことによって、和語を基調とする和文において、読者の文章理解を進めやすくしていると考えられる。その最も特徴的な語として、動作主体と動作対象をほぼ固定して使われる漢語動詞「奏ス」や「啓ス」を認めてよいであろう。敬語という範疇には入らないが、動作主体と動作対象の間に限定的な関係が認められ、表現者と理解者の間に、親疎関係に基づく心的関係性が認められるという点において、「怨ズ」にも漢語動詞である「奏ス」や「啓ス」に類する特徴が認められるといえるのではなからうか。

- (1) 『日本国語大辞典 第二版』(二〇〇一年 第一刷 小学館)
- (2) 『新編日本古典文学全集』(源氏物語 全六冊 阿部秋生 他 校注・訳者 小学館 一九九四年 第一版第一刷)
- (3) 『下官集』(『国語学大系 仮名遣 一』5頁 昭和40年 福井久蔵編 白帝社)
- (4) 『源氏物語古註釈叢刊 第一巻 源氏釈 奥入 光源氏物語抄』(中野幸一 他編 平成二年 初版発行 武蔵野書院)
- (5) 『紫明抄・河海抄』(玉上琢彌編 昭和43年初版 角川書店)
- (6) 『源氏物語大成 巻七 研究資料篇』(池田龜鑑編 昭和三十二年 中央公論社)



- (7) 注5に同じ。
- (8) 『古辞書研究資料叢刊15 類字源語抄 統源語類字抄』(木村晟  
一九九六年 大空社)
- (9) 『源氏物語古注集成 第九卷』(井爪康之編 昭和59年 桜楓社)
- (10) 「上代における動詞「怨」「恨」の意味用法―漢字受容史の観点か  
ら―」(柚木靖史 『広島女学院大学大学院言語文化論叢』第十八号  
二〇一五年)
- (11) 『群書治要 二』(450頁 汲古書院 平成元年)／『古典籍索引叢書  
第十卷 宮内廳書陵部藏本群書治要經部語彙索引』(山本秀人ほか  
編 平成八年 汲古書院) 用例は筆者の訓み下しによる。
- (12) 『源氏物語注釈 一』(初版第一刷 山崎良幸著 風間書房)
- (13) 『源氏物語評釈 第一卷』(昭和42年 三版 玉上琢彌)